



ホスピタルdERU 2017



イラク紛争犠牲者救援 2017



大規模地震時医療活動訓練 2017



Bangladesh南部避難民救援 2017 ©IFRC

# 大阪赤十字病院 国内外の救援活動 2018

## 国際医療救援部

Japanese Red Cross Osaka Hospital International Medical Relief Department

Bangladesh南部避難民救援 2017



南スーダン紛争犠牲者救援 2017 ©ICRC



イラク紛争犠牲者救援 2017



中東地域紛争犠牲者支援 2017

日赤近畿地区合同訓練 2017



日本赤十字社  
Japanese Red Cross Society

大阪赤十字病院

人間を救うのは、人間だ。 Our world. Your move.



# 日々の国内・海外支援の動き

国際医療救援部の公式フェイスブックを始めました。どんなことをしているのか、日々の業務をフェイスブックにアップしています。また、災害関連の有用な情報や豆知識、セミナーや帰国報告会などのご案内もフェイスブックに随時掲載していますので、ご覧いただけると幸いです。



## 大阪赤十字病院国際医療救援部公式フェイスブック

<https://www.facebook.com/大阪赤十字病院国際医療救援部-355328871229152/>



スマホでも見られます。

皆さまの「いいね!」  
お待ちしております。

「大阪日赤国際」で **検索** していただくと出てきます。

また、活動の詳細は、[当院ホームページ](#) → [「病院のご案内」](#) → [「国際救援活動について」](#)に掲載しています。



## 大阪赤十字病院国際医療救援部公式ホームページ

<http://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/index.html>



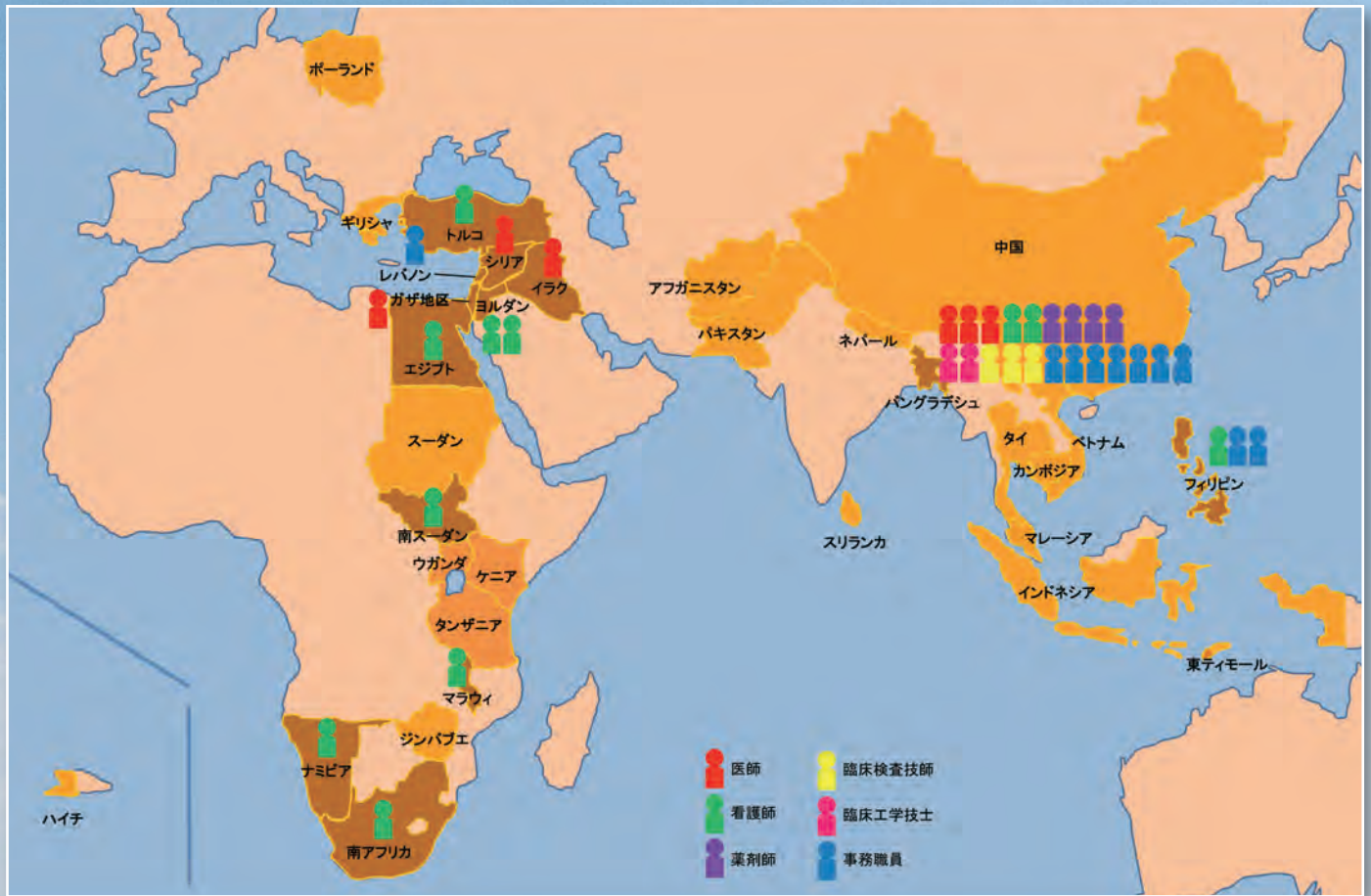
スマホでも見られます。





# 2017年度の大阪赤十字病院職員の海外派遣

2017年度の当院の海外支援は、51人×月の職員を13カ国に派遣し、活動を行いました。  
派遣した職種は、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、臨床工学技士、事務職員です。



上の世界地図のこげ茶色の国 ■ が、2017年度に派遣した国、薄茶色の国 ■ は、過去に職員を派遣した国です。

2017年度は、大きな国内災害は幸い起こりませんでしたが、海外支援は、ヨルダンに逃れてきたシリア難民の人々やミャンマーからのバングラデシュ南部への避難民などの難民支援と、イラク、南スーダンでの紛争犠牲者救援など、人為災害による人道危機の対応に追われた1年でした。難民支援は自然災害とは異なり、被災者が時間の経過とともに減っていくとは限らず、終わりの予測が付きません。2018年度も引き続き対応していくことになろうかと思えます。

2018年度は、新たにパレスチナ難民、シリア難民への支援事業を開始します。地震や台風などの自然災害による被害と異なり、紛争、難民といった人為災害は、日本の方々にとっては共感しにくいものかもしれませんが、シリア危機は500万人、バングラデシュは60万人を超える難民が非常に厳しい環境に置かれ続けています。皆さまのご理解、ご支援をよろしくお願いいたします。

大阪赤十字病院 国際医療救援部 中出 雅治



## 南スーダン紛争犠牲者救援事業〈南スーダン・ジュバ〉

看護師

▶ 派遣期間: 2017年3月11日～2018年3月14日

南スーダンの首都ジュバのミリタリーホスピタルの一部を赤十字国際委員会 (ICRC) が借りる形で戦傷負傷者の治療を行っており、2017年3月から1年間、ここにヘッドナースとして当院から看護師を派遣しました。

病棟ナースとして何度もICRCの戦傷外科病院に派遣された経験を持つ看護師でしたが、今回は初めてのヘッドナースとしての派遣です。ICRCのヘッドナースの仕事は、日本と同様に病棟の管理業務の他に、次から次へとやってくるICRCの外国人スタッフの調整も行います。スタッフの評価もヘッドナースが行うので、非常に気苦労の多いポジションです。

南スーダンには雨季と乾季があり、例年雨期になると戦闘が少なくなるため、患者さんが劇的に減るのですが、2017年は戦闘が継続し、患者数があまり減りませんでした。そのため、新しい場所に移動

型外科チームが設置されるなど、活動を広げています。

病棟の患者さんは戦闘の激化のために軍人が多く、一般人は少ないのですが、時折子どもや女性が混じります。そのなかには精神的なトラウマを抱えている人が少なくありません。これに対して、どのようなシステムでメンタルサポートを行っていくのかを、病院全体で取り組んでいます。



ガニエルのベースキャンプ



オールドファンガックのベースキャンプ

## イラク紛争犠牲者救援事業〈イラク・モスル〉

医師

▶ 派遣期間: 2017年8月14日～10月5日

2017年2～3月および8～10月にかけて、イラク紛争犠牲者救援事業に2度医師を派遣しました。足かけ3年に渡り反政府勢力に占領されたモスル、その奪還作戦により生じた紛争犠牲者に対して、赤十字国際委員会 (ICRC) が世界各国から集めたスタッフで外科手術チームを編成し、戦傷外科治療を行いました。当院医師は救急医として1度目はアルビルで、2度目はモスル総合病院の救急室 (ER) において、ICRCスタッフや地元スタッフとともに治療を行いました。

怪我をして間もない兵士や一般市民が身体に多くの傷を負い、痛みを苦しみながら運ばれてくると、ERは途端に戦場になります。傷の多くは、地雷や爆弾による多発外傷で、非常に治療が困難です。銃で撃たれた方や空爆によるガレキの下敷きになった方もいます。これらの方々には救命治療を行っていく一方で、速やかに痛み止めをしてあげなければなりません。次々に患者さんが運ばれてくるなか、茫然自失する時間はなく限られた状況のなかで、人と物とができることを最大限やっていくしかありません。

戦地に近い場所での診療はさまざまな危険が伴います。モスルでは、兵士が赤十字のルールに反して銃を持ったまま病院へ入ってくるのが度々ありました。多くは付き添いの兵士ですが、同僚が重傷を負ったので非常に興奮しています。このような場合、ICRCの危機管理ルールに沿った冷静な対処が必要です。私たちはセキュリティについて入念な準備をしていますが、実際に地元スタッフが兵士に危害を加えられたこともあります。

アルビルでは、化学爆弾によると思われる熱傷を負ったご家族の治療を行いました。突如降ってきた爆弾により怪我をした子どもの気持ちはいかにばかりかと思いました。モスルでは戦争が終わったにもかかわらず残された地雷で受傷し、瀕死の重傷を負ってくる一般市民が後を絶たず、戦争の悲惨さを目の当たりにしました。

これからも戦争で傷ついた人々のためにできることを精一杯させていただきます。



ERにて治療中 (モスル)



多数傷病者搬入時のER (モスル)



化学損傷の患者さんと (アルビル)



▶ 派遣期間:2017年4月25日～10月24日  
2017年10月14日～2018年4月15日

2011年のシリア危機以降、シリアの隣国ヨルダンは65万人以上のシリア人難民を受け入れています。そのうち、約8割のシリア人難民の方が難民キャンプではなくヨルダンの市街地で生活しています(2017年12月時点)。

ヨルダンは国土の8割が砂漠で、世界で3番目に水が少なく、かつ中東にありながら石油産業のない国です。そのため、多くのシリア人難民の受け入れはヨルダンにとっても負担となり、難民受け入れによる物価や家賃の高騰などが問題となっています。当初はシリア人難民も対象であった保健医療サービスも2014年よりシリア人難民は対象外となり、全額自己負担となりました。このため、シリア人難民の方は、病気になったり持病が悪化したりしても、医療費を捻出できないと医療サービスを受けられないという状況が課題となっています。

これに対しヨルダン赤新月社は、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)の支援のもと、2014年より、シリア人難民とヨルダン人を対象に地域住民参加型保健事業を行っています。当院からも2016年から継続してこの事業に職員を派遣しており、2017年度には2名の看護師を6カ月交替で派遣しました。

本事業は、シリア人とヨルダン人の両方から地域保健ボランティアを育成し、家庭訪問、学校訪問、地域での健康キャンペーンを行っています。地域保健ボランティアがヨルダン人とシリア人両方



子どもたちに衛生パンフレットを配布する当院看護師



健康的な食事について指導し、果物を支給します



ボランティアさんとともに子どもたちに衛生指導を行う様子



分かりやすく衛生指導を行います



暴力防止を呼びかけるヨルダン赤新月社のロールスタンド



ヨルダン・マダバ支部の一部を借りてボランティアさんのトレーニングを行う様子

の家庭と学校を訪問し、健康に関するレクチャーを行うことで、人々が病気を予防する知識を身に付けて地域の健康状態が向上することを目的としています。ヨルダン



アンマンのサマースクールで子どもたちに衛生キットを配布

では、偏った食習慣や喫煙習慣、車中心の生活による運動不足などから、心血管疾患・脳卒中・糖尿病・高血圧が死因の上位を占めており、生活習慣病の増加が大きな問題となっています。また、病気だけでなく男女平等や暴力防止、こころのケアなどについても取り扱い、人々が地域で心身ともに健康に過ごせることを目標に活動を行っています。2017年には109人の地域保健ボランティアを育成し、22,935人の住民に健康教育を行うことができました。

長引く中東危機により、先が見えない苦悩のなかで、人々は息の長い支援を必要としています。今後、より多くのシリア人難民とヨルダン人の方々に支援の手が届き、いつの日か難民の方々が精神的にも身体的にも元気な状態で故郷の地を再び踏むことができるよう、願ってやみません。



## Bangladesh南部避難民救援事業〈 Bangladesh・コックスバザール〉



2017年8月25日以降、ミャンマー西部のラカイン州で相次いだ激しい暴力行為を避けるために、多くの住民が隣国の Bangladeshへ避難しました。

1日に数千人、時には1万人以上が国境を越え、3カ月間で避難した人々の数は、62万人以上にのぼりました。(2017年11月25日現在・国連発表)

日本赤十字社は、現地で高まる医療ニーズに応えるため、国際赤十字の要請を受けて、緊急対応ユニット(ERU)の出動を決定しました。



赤十字の救援物資配布を待つ避難民たち

**先遣隊** ▶ 派遣期間: 2017年9月16日～9月26日 看護師  
2017年9月16日～11月30日 事務職員

2017年9月中旬より、当院の看護師1名と事務職員1名を含む5名からなる先遣隊を Bangladesh南東部コックスバザールに派遣し、現地調査を行うとともに緊急対応ユニット(ERU)の受け入れ準備を行いました。

自然保護区を切り開いて作られた避難民キャンプには、見渡す限り一面に、竹とビニールシートで作られたテントが立ち並んでいます。地面に浅く穴を掘っただけのトイレから、雨水によりあふれ出た汚物が、雨水で泥状に変化した土壌と入りまじって辺りに悪臭を放っています。急峻な丘がいくつも連なった地形、雨季の激しい雨により泥状に変化した土壌に足を取られて、活動初期のニーズ調査はなかなか進みませんでしたが、活動地を決めて巡回診療を中心に始めることとしました。



避難民からの聞き取り調査を行う当院看護師

**初動班・第2班** ▶ 派遣期間: 2017年9月22日～12月7日 臨床検査技師(初動班～第2班まで継続)  
2017年9月22日～10月26日 薬剤師  
2017年9月16日～11月30日 事務職員(先遣隊～第2班まで継続)  
2017年11月13日～11月30日 臨床工学技士

2017年9月下旬よりERU初動班が現地入りし、また10月下旬より第2班が交代で派遣され活動を行いました。初動班に当院からは、チームリーダー(臨床検査技師)、管理要員リーダー(事務職員)、メディカルロジスティクス要員(薬剤師)の3名が派遣されました。

初動班は避難民キャンプの小規模な敷地を確保し、避難民の協力を得て、現地で調達可能な竹やビニールシートを使用して巡回診療の拠点を設営し、現地の赤十字社である Bangladesh赤新月社とともに、医療チーム2班を結成して巡回診療を行いました。

また、「子どもにやさしい空間」Child Friendly Space(CFS)を設営して、こころのケア活動を開始しました。



日赤が設置した「子どもにやさしい空間」(Child Friendly Space)



キャンプ内に敷地を確保して巡回診療を実施



主要な疾患は、呼吸器感染症、下痢症、皮膚疾患で、1日平均200名の避難民が日赤の提供する巡回診療サービスを利用しました。

第2班では、巡回診療やこころのケアを継続する一方で、レントゲン撮影や小外科手術などの高度な医療を提供でき、また下痢治療ユニットDiarrhea Treatment Unit (DTU) への転換が可能な

仮設診療所の建設を行いました。この仮設診療所では、清潔区域と汚染区域が区別され、また高度医療機関としての機能を発揮できるようにレントゲン撮影室、小外科手術室が設置されています。仮設診療所設営のための技術要員として、当院の臨床工学技士が追加派遣されました。



避難民キャンプで聞き取り調査を行う当院職員(管理要員)



服薬指導を行う当院薬剤師



仮設診療所への深井戸の設置について、他国赤十字社職員と協議を行う当院職員(技術要員・臨床工学技士)



各国の赤十字社と情報共有を行う当院職員(チームリーダー)

**第3班** ▶ 派遣期間:2017年11月24日~2018年1月11日 医師、2017年11月24日~2018年1月25日 薬剤師

**第4班** ▶ 派遣期間:2018年1月5日~2月22日 看護師、薬剤師、事務職員

**第5班** ▶ 派遣期間:2018年2月16日~3月22日 医師、事務職員3名、2018年3月1日~3月22日 薬剤師

2017年12月上旬より活動を引き継いだ第3班では、当院の医師1名と薬剤師1名が派遣され、巡回診療と仮設診療所の運営を引き継ぐとともに、流行が始まったジフテリアへの対応を行いました。また第4班では、当院の看護師、薬剤師、事務職員が派遣され、現地の赤十字社・バングラデシュ赤新月社への将来の業務移管を想定して、現地スタッフやボランティアへの指導に重点を移しながら

活動を継続しました。診療者数の累計は第4班の時点で2万人を超えています。

現地では、いまだ80万人を越える避難民が不自由な生活を強いられており、国際赤十字は過去数十年間にアジア地域で発生した、最も甚大でかつ複雑な人道危機のひとつと捉えています。引き続き医療ニーズに対応するため、第6班以降も継続して派遣しています。



皮膚感染症を悪化させて受診した避難民の処置を行う当院医師



現地スタッフに処置の指導を行う当院看護師



仮設診療所で診療を行う当院医師



現地スタッフの面接を行う当院職員(管理要員)



現地スタッフとともに資機材の移送作業を行う当院職員(技術要員)



現地スタッフリーダーと人事管理の調整を行う当院職員(管理要員)



現地スタッフとともに薬剤の用量を確認する当院薬剤師

※国際赤十字では、政治的・民族的背景および避難されている方々の多様性に配慮し、「ロヒンギャ」という表現を使用しないこととしています。



## シリア避難民支援事業モニタリング(トルコ・メルスィン)

看護師

▶ 派遣期間: 2017年11月14日～11月18日

2018年現在、シリア国内紛争で発生した大規模な難民の発生から7年の月日が経ち、500万人もの難民が周辺国に逃れ、そのうち300万人以上がトルコ共和国で暮らしています。国際赤十字・赤新月社連盟は日本政府の資金協力により、トルコ国内の10数カ所でシリア難民の健康と生活を支えるコミュニティセンターの運営を行っています。

この事業の進捗状況を調査するため、センターの視察に赴き、利用者にインタビューをしたり、自宅を訪問したりしました。コミュニティセンターの主なサービス内容は、難民登録手続きの支援、成人や子ども向けのカウンセリングやトルコ語などの文化教室の開催、子育てや教育に関する相談、職業訓練と就職先の斡旋など多岐にわたります。また、子どもを対象にしたフレンドリー・スペースも設けられており、訪問時には小学校の生徒たち

への「交通安全教室」が開催されていました。難民が地域社会とのつながりを持てるよう、交流イベントも積極的に行っています。「お金や物の支援も大切ですが、一人ひとりが抱える悩みや問題に寄り添い、ともに解決策を見出す支援こそが、最も求められていると思います」と現地スタッフの力強い言葉が印象に残りました。自宅訪問では、4人暮らしの家庭を訪ねインタビューをしました。政府からの義援金を受けており、一人は障害を持ち薬代などの治療費がかさみ、生活は困窮していました。難民であることだけでも生活が脅かされるなか、障害を持つ人々や家族にとってはより一層過酷な状況です。今回のトルコをはじめ、世界の各地で多くの難民・避難民への支援が求められています。『今世紀最大の人道危機』といわれるシリア難民の存在を決して忘れず、継続的な支援を行いたいと思います。



シリア難民支援のコミュニティセンター



トルコの交通ルールを学ぶ子どもたち



センターの利用者にインタビュー

## 南部アフリカ地域感染症対策事業モニタリング(南アフリカ、ナミビア、マラウイ)

看護師

▶ 派遣期間: 2018年2月17日～3月1日

日本赤十字社は2010年からHIV/AIDSに関する感染症対策に焦点を置き、南部アフリカ地域を支援してきました。2017年度は南アフリカ、ナミビア、スワジランド、マラウイ、ザンビアの5カ国を支援。国際赤十字を通して日赤の資金が各国赤十字社に届けられ活動が行われており、事業の進捗状況のモニタリング目的で南アフリカ、ナミビアとマラウイの3カ国を訪問しました。

世界のHIV感染者のうち、7割近くがサハラ以南のアフリカに住んでいます。同地域の新規感染者のうち74%が少女や若い女性で、毎日およそ1,000人の少女がHIVに新たに感染しているといわれています。また、HIV/AIDSによって親を亡くした孤児も多く、貧困や未就学などの要因から新たなHIV感染のハイリスク群となっています。

日赤の支援を受ける5カ国の赤十字社は、赤十字の最大の強みである地域ボランティアのネットワークを活かして、街角でのHIVテストとカウンセリングの提供、HIV陽性の方々への家庭訪問やサポートグループの開催、



マラウイ赤十字のボランティアさんと地域でインタビュー

HIV/AIDS孤児の学費支援やキッズクラブ(放課後に子どもたちが集まって宿題を見てもらったり食事の提供を受けたりする)の開催、HIV陽性の方々の生計支援(ヤギの飼育や作物栽培の支援)などの活動を行っています。

HIV陽性で赤十字の支援を受けている方にインタビューをすると、「HIV陽性だと判明したときは生きる希望を失った。でも、赤十字の支援のおかげで正しい知識を持ち治療を継続できており、恐れを持たずに生きられるようになった」と話されていました。また、地域でのHIV感染ハイリスク群にもアプローチするため、HIV陽性の方だけでなく母子家庭や貧困世帯なども支援対象としています。

HIV陽性の方々が治療を今日も明日も確実に継続できるように、そしてHIVに感染していない人々が残りの人生をHIV陽性となることなく過ごせるように地域ボランティアの協力のもと2018年もこの支援を継続しています。



南アフリカ赤十字のキッズクラブの子どもたち



ナミビア赤十字支援で家を受け取ったHIV孤児の祖母にインタビュー



## 看護師のための海外スタディツアー



地域住民とボランティアの方々と記念撮影

日赤以外の施設所属者を含む6名の助産師、看護師が全国から参加しました。

滞在先はセブ島北部で開発が進むボゴ市。この街を拠点に、さらに北部のメデリエン郡とダアンバンタヤン郡にある、日赤とフィリピン赤十字社の事業地を訪れました。

この地域は、2013年11月にスーパー台風「ハイヤン(現地名:ヨランダ)」により甚大な被害を受けました。日赤は台風通過後からこの地域で緊急救援事業を展開し、医療・保健分野で被災者を支援しました。さらに、2014年4月からは3年間にわたり同地域でより長期的な復興支援事業を実施し、住宅再建、生計向上、防災、保健、給水衛生などの分野で包括的な支援を提供しました。この復興支援事業を2017年1月に完了した後に開発事業へと移行し、現在は2年間の予定で地域保健衛生分野の支援を継続しています。



当時の体験を語る被災者



現地ボランティアさんと一緒に地域住民に話を聞くツアー参加者

普段、病院で勤務する日本の看護職にとって『地域保健』とは馴染みの薄いものかもしれません。短期間により多くのことを見て学んでいただくため、参加者には赤十字の事業や用語に関する事前学習のための資料を提供し、渡航前の顔合わせを兼ねたブリーフィングも実施しました。ツアー期間中には、地域保健衛生事業で非常に重要な役割を果たす赤十字ボランティアさんと話したり、彼らに同行して地域での活動を体験したりする内容を組み込みました。他にもツアー内容として、台風の被災者から当時の体験を聞いたり、日赤が緊急救援を行った際の診療所設営地を訪れて場所の選定時に考慮しなければならないポイントを参加者同士で考えたりしました。

ツアーの最後には、赤十字ボランティアさんと実際に村を歩き、災害時にその村にとって資源となりうるもの、脅威となりうるもの、そして災害時に特に支援を必要とするであろうと思われる家庭など、地域保健衛生の観点からさまざまな発見、をしました。それらを村の地図に書き込み、参加者同士で発表、議論する機会を設けました。

フィリピン赤十字のスタッフ・ボランティアさんからは昨年引き続き参加者をウェルカムしてくれ、たいへん楽しいツアーとなりました。現地の協力があって、赤十字の活動や地域保健衛生分野、そして今回訪れた地域についての知識を深めることができたのではないかと思います。また、幸い天候にも恵まれ、さまざまな場所への訪問や多くの方々との触れ合いを通して、短期間でしたがフィリピンの文化にも触れられたことと思います。

2018年度にはどのようなツアーを作り上げられるか、企画を担当する当部もとても楽しみにしています。

本スタディツアーは、日本赤十字社(日赤)が活動する海外の事業地を訪問することで国際活動の実際を知り、異文化に触れてもらおうとの目的のもと、2015年から当院企画で全国の看護職を対象に参加者を募り、実施しています。2017年度には、2016年度に引き続きフィリピン共和国セブ島北部を訪問しました。9日間の日程で行われた2017年度のツアーには、



ボランティア活動体験

普段、病院で勤務する日本の看護職にとって『地域保健』とは馴染みの薄いものかもしれません。短期間により多くのことを見て学んでいただくため、参加者には赤十字の事業や用語に関する事前学習のための資料を提供し、渡航前の顔合わせを兼ねたブリーフィングも実施しました。ツアー期間中には、地域保健衛生事業で非常に重要な役割を果たす赤十字ボランティアさんと話したり、彼らに同行して地域での活動を体験したりする内容を組み込みました。他にもツアー内容として、台風の被災者から当時の体験を聞いたり、日赤が緊急救援を行った際の診療所設営地を訪れて場所の選定時に考慮しなければならないポイントを参加者同士で考えたりしました。

ツアーの最後には、赤十字ボランティアさんと実際に村を歩き、災害時にその村にとって資源となりうるもの、脅威となりうるもの、そして災害時に特に支援を必要とするであろうと思われる家庭など、地域保健衛生の観点からさまざまな発見、をしました。それらを村の地図に書き込み、参加者同士で発表、議論する機会を設けました。

フィリピン赤十字のスタッフ・ボランティアさんからは昨年引き続き参加者をウェルカムしてくれ、たいへん楽しいツアーとなりました。現地の協力があって、赤十字の活動や地域保健衛生分野、そして今回訪れた地域についての知識を深めることができたのではないかと思います。また、幸い天候にも恵まれ、さまざまな場所への訪問や多くの方々との触れ合いを通して、短期間でしたがフィリピンの文化にも触れられたことと思います。

2018年度にはどのようなツアーを作り上げられるか、企画を担当する当部もとても楽しみにしています。



現地のナースの話に興味津々



現地の方に御馳走していただきました



現地の病院へ訪問



## 2018年から、2つのプロジェクトが中東で始動!

### ●シリア難民、レバノンの小学校を支援 ～「未来ぶらりい」プロジェクト～

国際ソロプチミストアメリカ 日本中央リジョン様の、設立30周年記念事業の対象として当部署が選ばれ、いただいたご寄附を基に、2018年から3年計画で、レバノンに逃れたシリア難民と、それを受け入れているレバノン人の両方の小学生のための支援事業が開始されました。

2011年のシリア危機以降、レバノンには推定150万人のシリア人難民が逃れて来ていますが、彼らの大半は劣悪な生活環境にあります。

シリア難民の子どもたちの教育の場がないため、レバノン国内でいくつかの小学校が、1日を2部制にし、午前中にレバノンの小学生、午後にはシリア難民の小学生に授業を行っています。

これらの小学校の多くは設備が古く、あるいは過去の紛争で損害を受けており、これらの修復作業と、子どもたちへ日本の授業などを行うことを考えています。1年に3校ずつ、3年間で計9校を支援する計画で、国際ソロプチミストアメリカ 日本中央リジョン様からのご寄附以外に、このプロジェクトに賛同してくださった、三菱鉛筆株式会社様、消しゴムの株式会社シード様などから文房具のご寄附もいただき、有効に活用させていただいています。このプロジェクトは、子どもたちの未来をつくるという意味で、「未来ぶらりい(未来図書館)」プロジェクトと名付けています。



プレイグラウンド

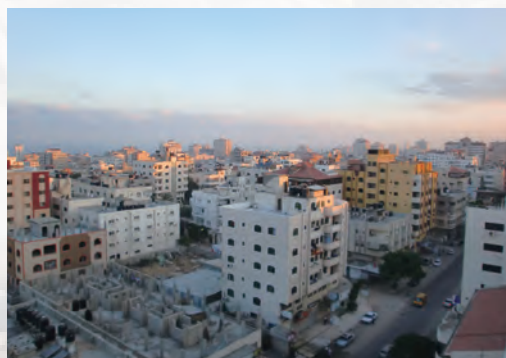


銃弾の残る小学校の壁



シリア人難民キャンプ

### ●パレスチナ難民の医療支援 ～中東医療支援事業～



ガザの街並み

1947年のイスラエル建国以来、ガザとヨルダン川西岸、および周辺国に逃れたパレスチナ難民の置かれた現状は困難で、医療についてもそれは同じです。そのなかで、レバノン国内のパレスチナ難民の病院5つと、ガザ地区の病院2つに、全国の日赤病院から医師、看護師などを送り、医療支援を行います。具体的には、各病院に医師1名、看護師2名を1チームとし、最近の医療とのギャップを埋める作業を行います。特に救急と外科の分野、大量の外傷患者が出たときのシステム作り、新生児ケアの質の向上、手術室看護師の教育などです。支援する病院はすべて外務省海外安全情報のレベル3にある地域で、事業のマネジメントには現地との密接なコラボレーションが求められます。

事業立ち上げとマネジメントのため、2018年3月から当部署より事務職員を1年間ベイルートに駐在させています。



ガザシティのパレスチナ赤新月社の病院



# 大阪赤十字病院の 国内災害への取り組み



本院の大規模災害への取り組みは、1923年(大正12年)の関東大震災にまで遡ります。このとき本院は、海路で救護班を東京に派遣して救護活動を行うとともに多数の傷病者を病院に受け入れました。以来第二次世界大戦での戦時救護はさんで、多くの国内災害で医療チームを派遣してきましたが、現在の本院の災害救護体制の基礎となったのは、やはり1995年の「阪神淡路大震災」です。当時は本院自身も被災しましたが、多くの被災者を受け入れ、医療チームを発災当日から2カ月にわたって毎日派遣しました。

この経験からわかったことが2つあります。

- 1 本院が被災した場合、完全に能力はパンクする。
- 2 他府県に医療支援のためのチームを送る際には、すべて自己完結で行かなければ迷惑になる。

以来本院は、

- 1 本院が被災した場合に備えて防災関係機関のみならず、周辺住民の方々とも普段から協力体制を築いておく。
- 2 医療チームは自らの衣食住を含めて完全な自己完結の資器材とシステムを構築する。

この2点を骨子として災害対策を進めています。10年以上前から大阪市消防、大阪府警、陸上自衛隊などの防災機関と行っている災害訓練や、多くの企業と災害時の協定を締結したり、9年前から地域住民の方を対象に病院を開放して行っている災害を学ぶセミナー「災育」は、**1**の取り組みです。また、他府県発災に対応するために10年かけて構築してきた、要員の衣食住まで完備したホスピタルdERU(14~15ページ)は**2**を具体化したものです。

今後とも皆さまのご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

## 親と子の防災セミナー「<sup>さいいく</sup>災育」、今年も8月5日(日)に開催。

2018年も8月の第1日曜日(8月5日)に、病院敷地内と本館1階、看護学校を開放して、体験型の防災セミナー「災育」を開催します。

対象は小学校4~6年生のお子さんとその保護者の方々です。

6月初旬に本院ホームページやフェイスブックなどのご案内しますので、ご応募ください。参加費は無料です。

ご家族で災害を考えるきっかけになれば幸いです。



AED講習



大阪市水道局



大阪市消防局



無線体験



受付



傷の特殊メイク



大阪府警



陸上自衛隊



避難所体験



防災の講演

2017年の  
災育の様子



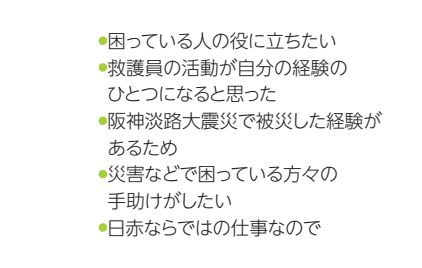
▶ 救護員になろうと思った理由



- 赤十字の一員として幅広い仕事をしたい
- 被災地の地域や人々の力になりたい
- 災害時に、医師としての自身の能力、技術を被災者の方々のために役立てたい
- 上司の勧め
- 災害時に人命救助ができるようになるため



- 災害時に人命救助ができるようになるため
- 災害で大変ななか、活動している救護員を見て憧れたため
- 薬剤師としての職能を活かして、業務の幅を広げることができればと思い希望した
- 若い力が必要だと感じた



- 困っている人の役に立ちたい
- 救護員の活動が自分の経験のひとつになると思った
- 阪神淡路大震災で被災した経験があるため
- 災害などで困っている方々の手助けがしたい
- 日赤ならではの仕事なので



- 看護師になって救護活動に携わりたいと思った
- 赤十字看護師の使命であり、やりがいのある活動だから
- 自分の持っている知識・技術を院外で役立てればと思った
- 師長に勧められた



- 自分の力を発揮したいと思った
- 興味があった

6月 ■ 赤十字救急法 近畿ブロック 合同災害救護訓練

Spring

5月 ■ 救護員 オリエンテーション

4月 ■ 救護員登録

国内救護班要員の  
1年に密着!!



Winter

- 災害時などに適切な対応ができるため訓練は必要だと実感した

当院では毎年4月、職種を超えて約100名の救護班要員が登録されます。要員は、1年間救護員としての知識、技能を身に付けるため赤十字主催の訓練や研修に参加するほか、各種防災機関などが主催する大規模な訓練に参加し、いざというときに備えています。今回はそんな要員たちの声をお届けします!

2月 ■ 近畿地区DMAT訓練



- もっと知識を増やしたいと感じた
- 研修の意義はあると思うが実践できるか不安である

1月 ■ 大阪府地震・津波災害対策訓練 ■ 災害看護師研修

- 訓練でテントの中の物品の配置や患者とスタッフの導線を考えることで、災害活動を具体的に考えることができた
- こころのケアの研修を軽視していたが、東日本大震災で岩手に行ったときその重要性がわかった。人に寄り添うということは簡単なことではない



- 災害現場での活動経験がなくても、研修で学ぶことでイメージでき、柔軟な対応で実践に役立った
- こころのケアに参加して、内面のサポートの重要性が学べた
- 他施設のDMATとの関わりが今後の課題
- 余裕がない状況で責務を果たすため、訓練の重要性、必要性を実感した



- 日赤は災害時のシステムが整えられていて、長年の経験が蓄積されていると感じ、素晴らしいところだと思った
- 岸和田の野外訓練はとても暑くて大変だったが、災害はいつ起こるか分からないので、その時期に応じた対策がとても重要になったと思った
- 多くの学びがあり、とても良い経験になった



- 実地訓練では、想定外のシチュエーション(天候、気温や実際の導線、連絡網、救護員の生活など)での活動となり、毎回課題が見つかるため、経験値が上がると感じた
- 訓練などで得た知識や技能を身に付け、災害に備えていきたいと思った
- 実際の救護の大変さを学ぶことができた

▶ 実際に訓練や研修に参加して

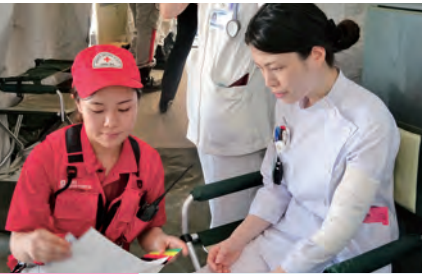


## ▶ 救護員を目指す方に一言!

- やりがいのある仕事。地域の人のためだけでなく、自分のためにもなる
- アセスメント力や対応力が問われ、とてもやりがいのある仕事だと思います。一緒にがんばりましょう
- 必ず経験をして欲しいと思える仕事です



- とてもやりがいのある仕事です
- 日々の積み重ねが現場での活動に役立つので、がんばってください
- 仲間が増えて普段と違う経験ができます
- 病院では学べないことが学べて、すごく勉強になる仕事です
- 医療に携わる身として、非常にやりがいがある仕事です。互いにがんばりましょう。



- とてもいい経験ができると思います
- ここでしかできない経験です。他ではできない達成感が得られるでしょう
- 大変な仕事ですが、皆さんの力が必要です。一緒にがんばりましょう
- 被災地で被災者から感謝の言葉を聞くととてもうれしいです。ぜひ興味があれば一緒にやりましょう



- 研修などを通して新たな自己課題も見出せると思います。がんばりましょう
- 興味があれば、まず一歩踏み出して欲しいです。日赤はしっかりとその後のサポートをしてくれます
- 皆さんの力をどこかで誰かが必要としています
- いい人ですね

## 7月 ■ 救護員ステップアップ・dERU研修 ■ 内閣府広域災害訓練

## 8月 ■ 災害

## 9月 ■ こころのケア研修

### 救護員職種内訳(2017年度) 救護員総計:113名

医師	19名
看護師・助産師	47名
薬剤師	9名
放射線技師	7名
臨床心理士	1名
理学療法士・作業療法士	4名
臨床検査技師	3名
臨床工学技士	2名
事務職員	19名
調理師	2名

# Summer



## 10月 ■ 院内災害訓練

## 11月 ■ 近畿府県合同防災訓練 ■ 関空航空機事故消火救難総合訓練

## Fall 10~12月 ■ 運転免許取得研修



- いつ災害が起こるかわかりません。赤十字の看護師としての確に行動することができるよう、一緒にがんばりましょう
- みんなで力を合わせて、助け合いましょう
- 平時に臨床で行っている看護実践が災害現場で活かされます。赤十字のチーム力はすごいです



- 日々の業務では発見できない、新しい自分の発見にもなると 생각합니다。一緒にがんばりましょう
- 被災地では不慣れなことが多いですが、救護員にしかできない医療活動があります。がんばってください
- 大変なこともあります。とてもやりがいのある仕事だと思います

- 救護員は、被災地の方々が復興に向かおうとする思いに誠実に寄り添えるように、専門的な学習を経て、被災地で活躍できるのだと思います。やりがいがあり自己成長に繋がると思っています
- 赤十字病院であるからできる仕事なので、誇りに思っています。がんばってください



- 災害救援を行うには、とても多くの人の力が必要です。そして、異なる職種の方々と同じ目的に向けて取り組むことはとてもやりがいがあります。ぜひ一緒にがんばりましょう
- 正しい知識を得ることが自信に繋がります。そのときに力を発揮できるように、一緒にがんばりましょう





# 大阪赤十字病院ホスピタルdERU (災害対応野外病院)

## dERU (domestic Emergency Response Unit) とは?

国際赤十字では、主に自然災害に即応するために必要な物資をユニットとしてまとめて維持管理をするERU (Emergency Response Unit) というものがあり、1990年代から運用しています。これを土台に日赤と厚生労働省が、トラックと一体化したクリニックのユニットを国内災害用に開発、2002年から順次太平洋側を中心に現在19基が配備されています。

### ●大阪赤十字病院ホスピタルdERUとは?

他の都道府県に配備されているdERUは、1台のトラックのコンテナにクリニックを設営できる資機材をすべて入れ、コンテナごとトラックから降ろしてクリニックを展開するものですが、当院が保有するdERUは、これを拡張し、レントゲン室や手術室、ICU、病棟などを持つホスピタルを展開する大規模なユニット

です。WHOのタイプ2 (緊急対応野外病院) \* というカテゴリーの要件を満たすよう設計もされています。30~40名で運営し、外部からの補給なしで5日間、補給ありで6カ月間活動することができます。

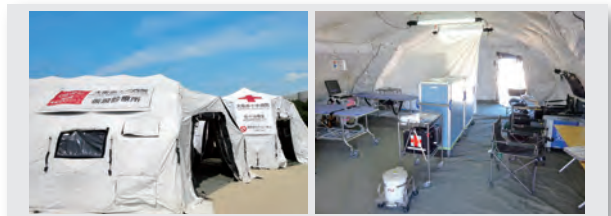
\*WHO EMT タイプ2: 2013年よりWHOが緊急医療チームを3つにタイプ分け、タイプ2は病院型。



Japanese Red Cross Osaka Field Hospital 毎日新聞社提供



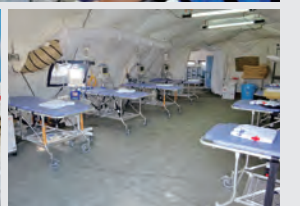
トリアージエリア



外来棟







ICU

手術室



レントゲン室



一般病棟



オフィス



重要

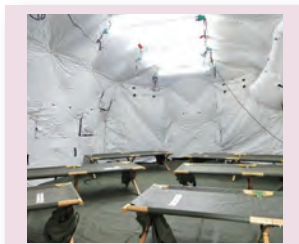
ホスピタルdERUは、  
周囲のインフラが完全に崩壊した状況でも機能するよう、  
水、電気、食事、宿泊などすべて  
自己完結できるよう設計しています。



給水



トイレ



宿泊棟



ダイニング/ミーティングスペース

●ホスピタルdERUは、大阪が被災した際の運用を現在大阪府と協議中です。





## Japanese Red Cross Osaka Hospital International Medical Relief Department



南スーダン紛争犠牲者救援 2017 ©ICRC



親と子の防災体験セミナー『災害』2017



ケニア地域保健強化 2016



Bangladesh南部避難民救援 2017 ©IFRC

## 大阪赤十字病院 国際医療救援部

〒543-8555 大阪市天王寺区筆ヶ崎町5-30

TEL:06-6774-5111(代表) FAX:06-6774-5131(代表)

<http://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/index.html>